

この指とまれ この指とまれ この指とまれ この指とまれ この指とまれ

### シンガポール短期留学を体験して

この一週間で私は大きな刺激を受けました。この交換留学プログラムは、日本とシンガポールの友好を深め文化や学習への取り組みなどを学ぶ為のもので、その間私たちはホームステイをさせて頂きました。日本語が分からなくて習慣も違う家庭にいざなり放り込まれるのは不安で一杯で、シンガポールへの飛行機の中で、帰りたいと何度も思いました。しかし簡単に会話できなくても心で伝えるしかないし、全身で意思表示すればきっと伝わると信じて、自分から話しかけるようにしました。みんなも私の言いたいことを読み取ってくれたり、私に分かるように話してくれたので、次第に英語で冗談を言ったり一緒に楽しむことができて、日をあうごとに言語を話すことに集中するのではなく会話を楽しめるようになりました。



筑波大学附属高等学校 3年 神原沙耶

またHCI（ホフチョン校）での経験も貴重でした。HCIはシンガポールの中でもトップクラスの学校で、大統領や科学者など未来を担う生徒を育てているところです。生徒は決して真面目で静かでひたすらデスクワークばかりというわけではなく、むしろ活発な子ばかりで、授業中、先生の話の途中や生徒のプレゼンの途中で疑問に思ったことはその場で質問します。先生からの問いかけも誰というわけではなく生徒みんながすぐに反応するし、またそれらの発言に異論があればもう一度発言し…と、ただ言われたことを真面目にガリガリ勉強するという訳ではなく、自分から学習していくという姿勢が感じられ、授業の中でディベートをしているようでした。この姿勢は本当に見習うべきだと思います。

シンガポールは多民族国家なので言語や宗教や食など色々な面に様々な国の文化が入り交じっていました。なので一回で色々な国の文化や考えを勉強できました。またそのように文化が違う人たちが自然にうちとけあっているのは本当に素晴らしいことだと思いました。

そのような新しい環境で、自分なりにもがいて失敗したり、時にはうまくいったりを繰り返したことで成長できたと思っています。これは変に恐れずに自分から新しい文化や人に関わっていこうとしたからだと感じています。これからも自分から積極的に挑戦する心を持ち続けていきたいです。そして近い将来またシンガポールに行って成長を見てもらいたいです。

### 新人教員奮闘中

### 『手探り』という日常

附属駒場中・高等学校 教諭 千野浩一



私は、昨年度、八王子市にあります私立東京純心女子中・高等学校を退職し、今年度、附属駒場中・高等学校に赴任致しました。前任校では通常の校務分掌の他に、新しいカリキュラムを検討する委員会に所属し、様々な学校のカリキュラムを調べる機会に恵まれました。東京都私学の教務研修会でも、数十校のカリキュラム表を見ましたが、どの学校の表も総じて複雑で、諸先生方の苦心が察せられます。ところが筑駒は、文・理系の区別がなく選択授業もごく僅か、6学年分の6列の欄がすっきりと並ぶだけのカリキュラム表！一方で、筑駒生の目覚ましい活躍は、あちこちから聞こえてきます。筑駒では一体どのような教育がなされているのかと、非常に興味深く思っていました。本校に赴任してすぐ、ある先輩教員から次のような助言を頂きました。「生徒に何かを教えようなどという姿勢は不遜です。ここでは教員は生徒とともに学び、発見を積み重ねていくしかないのです。」始業後まだ

3週間しか経っていませんが、この言葉の重みが日々増していくように感じています。生徒の発する声を羅針盤にしながら、探求と発見の喜びをともにするという姿勢がなければ、生徒がついてこないのです。あるいは、このようにおっしゃる方もいました。「気負わずに、あなたが面白いと思うことを自由にやってごらん下さい。」今までの自分の生き方が問われているように思いました。教材を探しながら、自分が本当に面白いと感じているのかどうかを厳しく吟味しなければなりません。見る人が見れば、それは必ず面白いはずだという確信が持てるまで突き詰めた準備が必要なのです。今、私は完全に手探りの状態にあります。しかし、これは悪いことではないと思っています。毎日が緊張の連続ですが、これを新人であるがゆえの非日常と捉えるのではなく、そのような日常の中にしか教員としての生活はないのだと、肝に銘じたいと思います。

### 附属視覚特別支援学校

附属の今

附属視覚特別支援学校 副校長 星 祐子

朝8時過ぎ、「行ってきまーす！」「行ってらっしゃい！」「体調は治った？」「大丈夫です」……そんなやりとりを交わしながら、寄宿舎から学校へ登校する中学部・高等部の生徒たち、9時には小学部生を乗せたスクールバスが玄関に到着します。そして、9時半頃になると、お父さんやお母さんと手をつないだ幼稚部生が登校してきます。朝は、活気に満ちた時間帯です。

本校の幼児・児童・生徒数は195名、そのうち、寄宿舎生は111名、幼稚部から小学部、中学部、高等部、高等部専攻科まで、年齢層も3歳児から60歳代の方まで、出身も北海道から沖縄まで、さらに、ベトナムやミャンマーなどアジア近隣からの留学生も在籍しています。また、鍼灸手技療法科生の臨床実習の場として治療室を併設し、年間約3300名の方々の治療にあたっています。

寄宿舎の食堂での給食風景



本校の母体となった楽善会訓盲院が授業を開始したのは今を遡ること130年前のこととなります。当時、学制が公布されて間もない時代に障害児教育に厚い情熱をかけた先達の方々の取り組みが礎となっていることに深い敬意の念を抱くと共に、歴史の重みを感じます。

こうした歴史の上にあぐらをかくことなく、「今、現在の特別支援教育、視覚障害教育の課題にこたえる学校」であるべく、日々の教育実践を積み重ねると共に、教育成果の発信にも努めています。視覚からの情報が入らない、入りにくい中で、いかに外界を捉えさせるか、膨大な情報を補っていくか、常に、この課題を意識しながらそれぞれの年齢層や発達段階に応じた働きかけや工夫をしています。

小学部生の業間音楽の様子



### 附属の新しい波

～プロジェクト研究の新しいスタート～



附属学校教育局 教授 石隈利紀

筑波大学にある11の附属学校の使命は、大学と連携して、内外の学校教育の促進に貢献することです。附属学校には、附属小学校・中学校・高等学校があり、坂戸高校、駒場中・高等学校があります。また視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、知的障害、自閉症のある子どもたちのための特別支援学校があります。附属学校は、「教育」を看板とする筑波大学の財産であり、激しく揺れる日本の学校教育にとって頼れるリソースです。

大学と附属学校の連携を担うのが、大学・附属学校連携委員会です。その中心的な課題に「プロジェクト研究」があります。平成21年度、大学・附属学校連携委員会で、プロジェクト研究のあり方、進め方、そしてテーマについて検討しました。11附属学校の教員を対象としたアンケートに基づき、現代社会のニーズと大学および附属学校の強みを活かすテーマを設定しました。またテーマの設定においては、附属学校の将来構想における3つの拠点、「先導的教育研究拠点」「教師教育拠点」「国際的教育拠点」を念頭におきました。

平成22年度のテーマは、新しい3つのテーマと、今年度最終年度になるテーマをあわせて、以下の4つです。

- 【先導的教育研究拠点】
  - ① 学校で「気になる子ども」への支援に関する研究
  - ② 子どものコミュニケーション能力を育てる
  - 【教師教育拠点】
  - ③ 附属学校の「知」を活かした教師教育の創造  
—教師教育のカリキュラム開発と授業モデルの構築—
  - 【国際的教育拠点】
  - ④ 国際的資質を育てる  
どれも、「今日的」で「魅力的」なテーマだと自負しております。
- 筑波大学附属学校から「新しい教育」を提案することをめざし、4つのプロジェクトを推進していきたいと思っております。附属学校、大学の先生方の参加をお待ちしております。

